

ロモノーソフの詩法について  
—その『ロシア詩法に関する書簡』執筆経緯を中心に—

植田 宏昭

18世紀はロシア史における転換期である。ロシアにおけるこの世紀は皇帝ピョートル1世 Петр I (大帝、位 1682-1725) の改革とともに始まった。ロシアの後進性を痛感した彼は反対勢力を強権をもって抑え、富国強兵のための強引かつ果敢な西欧化・近代化政策を推し進めている。そのため西欧から様々な制度や技術・学問・文物がロシアに移入することとなった。また彼はロシアで長い間政治的・社会的に強い影響力を及ぼして来た教会の権力も抑えたので、ロシアの文化は西欧化・近代化したのみならず、急速に世俗化して行くことにもなった。

このように、18世紀という時代はロシアの歴史と文化の双方にとっての転換期となったが、ロシアの近代化が文学の領域に反映されるようになったのは1740年代以降のことである。これはピョートルの開始した改革の成果がこの頃ようやくロシアに顕然化したことを示すものであると言えよう。そして筆者が修士論文で取り上げたロモノーソフという人物もまたこの時期に活動を開始している。

ミハイロ・ヴァシーリエヴィチ・ロモノーソフ Михайло Васильевич Ломоносов (1711-65)<sup>1</sup>という人物は北ロシアの農民の子として生まれながら学問に目覚め、家出同然で故郷を出て苦学してモスクワ、ペテルブルグの両都に学び、さらに選ばれてドイツに留学、西欧の先端諸学を修め、帰国後は明晰な頭脳と類い稀な勤勉とによって学芸百般に

---

<sup>1</sup> ロモノーソフの名前については、ロシア・ソ連の資料でも、日本の資料でも、一般に「ミハイル Михаил」とされているが、彼の署名を見ると「ミハイロ Михайло」となっているのがほとんどであるため、筆者は彼の本名は「ミハイロ」とであると考える。

驚くべき多才万能ぶりを示している。その活動は極めて多岐に渡るが、まず学者として彼は専門の物理科学を初めとする自然科学や地理学、歴史学、語学・文学研究に様々な業績を示す一方、詩人としても頌詩（ロシア語では「オーダ」ода）を中心とする多くの実作と理論書を著し、さらには芸術家としてステンドグラスやモザイク画の製作にも作品を多数残している。

ロモノーソフはピョートル 1 世が精力的に改革に取り組んでいた時期に当たる 1711 年に生まれ、西欧の先進諸学を修め、貴族が文化の中心的な担い手であったこの時代のロシアにあって農民身分の出身ながら大活躍している。また彼が学者・文人として活動を始めたのは、上にも述べた通りピョートルの改革の成果がようやくロシアに顕然化し始めた 1740 年代初めのことであった。こうしたことから、ロモノーソフはピョートルの改革によって幕を開けた西欧化・近代化の 18 世紀ロシアを体現する代表的な人物であると位置付けられる<sup>2</sup>。実際、驚くべき多才万能ぶりと疲れを知らない精力的な活動、それに巨大な体躯の持ち主であったことから彼はしばしばロシアの学界やロシア文学の世界で「ピョートル大帝」に喩えられることがある。そうした評言がいみじくも示しているように、彼はまさにロシアを西欧諸国と肩を並べる強国の 1 つに成長させようというピョートルの理想に応えた人物であると言っても過言ではない。

筆者がロモノーソフという人物に関心を抱いたのは何よりもそのユニークな経歴と驚くべき多才万能ぶりからであるが、彼が 1755 年（実際には 1757 年）に著した『ロシア文法』*Российская грамматика* がロシア人の手による初の体系的なロシア語文法であることを知り、それによって大学院入学以来ロシア語学、中でも特に 18 世紀におけるロシア語史に研究の主眼を置いて来た筆者の彼に対する関心は具体化することとなった。そして彼に関する調査が進展して行くに従って、彼の

---

<sup>2</sup> ピョートルが身分の区別なく有能な人物を登用したことは有名で、彼の廷臣の中には菓子屋の小僧上がりのアレクサンドル・メンシコフ Александр Меншиков やエチオピア出身のアブラム・ガンニバル Абрам Ганнибар（彼は詩人プーシキンの母方の曾祖父に当たる）といった、低い身分の出身ながら煥発な才気で頭角を顕した人々がいた。

初期の論考『ロシア詩法に関する書簡』Письмо о правилах российского стихотворства (1739、以下『書簡』) が実はその後のロシア詩の運命を決定付けたほどの大きな役割を果たしたものであることを知るに至ったのである。

ロシアでは17世紀以降文学上の1ジャンルとしての詩が確立されたが、その頃のロシア詩は外国詩、中でも特にポーランド詩から借用された「音節詩法」силлабическое стихосложениеによって作られていた。しかし18世紀に入ると、音節詩法というのがそもそもロシア語の本質に合ったものでないことが指摘され、新たな詩法を構築する試みがなされるようになった。ここで大きな役割を果たしたのがトレジアコフスキイ В. К. Тредиаковский (1603-1669) と、筆者が修士論文で取り上げたロモノーソフの2人である。ロシア詩法の改革に先鞭をつけたのはトレジアコフスキイで、彼は1735年に『新簡約ロシア作詩法』Новый и краткий способ к сложению российских стихов (以下『作詩法』) と題する論考を発表し、「詩脚」(ロシア語では“стопа”)の概念を導入することによるロシア詩法の改革案を提示した。ところが彼の改革案は従来の音節詩法にはなかった「詩脚」の概念を導入するという極めて斬新な点がある一方、詩行は一定数の音節によって組み立てられるとする音節詩法に基づく詩行の1次的な標識を残し、詩の格調としてはホレイ хорей (強弱格)<sup>3</sup>を「最も良きもの」とし、それに対して後のロシア詩で最も頻繁に用いられるようになるヤンブ ямб (弱強格)を退け、また脚韻にしても女性韻(語末から2番目の音節にアクセントのある脚韻)のみを認めるというような不徹底性を多々呈するものであった。ロモノーソフはトレジアコフスキイの『作詩法』に触発され、これに吟味、検討を加え、また古今のヨーロッパ詩、中でも彼が留学したドイツの詩と古典古代のギリシア・ラテン詩やローマのホラティウス Horatius の『詩論』Ars poetica、フランスのボワロー N. Boileau-Despréaux (1636-1711) の『詩法』Ars poétique (1674)、そしてドイツのゴットシェート J. C. Gottsched (1700-66) の『ドイツ人の

<sup>3</sup> ロシア詩の格調について、筆者は修士論文では初出の場合にのみ、例えば「ホレイ хорей (強弱格)」のように、原語による術語の後に丸カッコで日本語の訳語を併記し、以下原語を用いた。

ための批判的作詩法の試み』*Versuch einer kritischen Dichtkunst für die Deutschen* などの理論的な著作も学ぶことで彼自身の詩法改革案を構築し、それを『書簡』に提示した。両者とも主に実作を通して互いの詩法改革案の優位を主張し、激しい論争を繰り返したが、結果的に実作面での成功によってロモノーソフの主張が勝利し、彼が導入した新しいロシア詩法、すなわち「音節アクセント詩法」*силлабо-тоническое стихосложение* は広く認められることとなり、今日においてもなお中心的なロシア詩法として用いられるに至っている。

ロシア語は語によってアクセントのある位置が異なる言語（以下、自由アクセントを持つ言語）であり、またアクセント音節は無アクセント音節よりも幾分長めに、かつ強く発音されるという特徴を持つ。ロモノーソフはロシア語のこうした特質を見極め、ロシア語の本質に合った詩法である音節アクセント詩法を（ロシアにおいて）創始した人物なのである。筆者はロモノーソフの“詩法”構築の過程を特に『書簡』の執筆経緯を中心に考察・検討し、上に述べたような結論に到達したので、その成果を修士論文に発表しようと思ったものである。

筆者の修士論文の構成は、以下の通りである。

## はじめに

### 第1章 ロシア詩法の流れ

1. 18世紀に至るまでのロシア詩法
2. トレジアコフスキイの『作詩法』

### 第2章 ロモノーソフの詩法改革

1. ロモノーソフの生い立ちと学問
2. ロモノーソフの“詩論”の形成
3. 『ロシア詩法に関する書簡』と『ホチーン占領に寄せる頌詩』の執筆

### 第3章 詩人としてのロモノーソフ

1. ロモノーソフとトレジアコフスキイ
2. ロモノーソフにとっての「詩」とは
3. ロモノーソフと同時代、あるいは後代の詩人たち

## おわりに

資料篇 翻訳『ロシア詩法に関する書簡』  
文献

修士論文では、まず問題提起として「はじめに」を設け、そこではロシア史における、またロシア文学史における18世紀という時代の持つ意義を明らかにし、ロモノソフという人物を簡略に紹介し、この人物と筆者との出会いや筆者がなぜロモノソフの“詩法”を修士論文のテーマに選んだのかを述べ、ロモノソフがロシア詩法の真の改革者であり、また彼こそが「音節アクセント詩法」をロシアに初めて本格的に導入した人物であることを実証的に論じるという論文の目的と方法論を述べるものである。

「はじめに」で問題提起を行った上で第1章「ロシア詩法の流れ」が始まるのであるが、第1章は構成的に2節からなり、第1節は「18世紀に至るまでのロシア詩法」を、第2節は「トレジアコフスキイの『作詩法』」をそれぞれ論じるものである。

第1節「18世紀に至るまでのロシア詩法」では、まずロシアには古くからブィリーナ былина（英雄叙事詩）に代表される韻文の口承文芸（フォークロア фольклор<sup>4</sup>）が豊富にあったことを挙げ、その中には明確に理論化されてはいなかったがすでに特有の詩法が存在していたことを指摘し、それが今日的にいえば1詩行にアクセント音節が3つ配置される「アクセント詩法」тоническое стихосложение であることを指摘してから、そうした、いわば「書かれざる詩」の伝統とは断絶した形で17世紀中葉にロシアの文学上の1ジャンルとしての「詩」が作られるようになったこと、その詩法が「音節詩法」であったこと、音節詩法がポーランドから輸入されたものであること、ロシアの音節詩法を完成させた人物がベラルーシ出身の文化活動家シメオン・ポーロツキイ Симеон Полоцкий（1629-1680）であることなどを述べ、音節

---

<sup>4</sup> 筆者は修士論文で「フォークロア」という術語を、特に「口承文芸・口碑文学」を意味するロシア語の「フォリクロール」に当たるものとして用いている。なお、ロシア・フォークロア、中でも「歌謡（песня）」と呼ばれるものはその名が示す通り「歌唱される」が、ブィリーナというのは歌唱されるのではなく、緩慢な叙唱（レチタティーヴォ）調で「語られる」ものである。

詩法というのがフランス語やポーランド語のような、語の一定の位置にアクセントが置かれる特徴を持つ言語（以下、固定アクセントを持つ言語）に固有の詩法で、ロシア語のような自由アクセントを持つ言語の本質には適った詩法ではないこと、それにもかかわらず音節詩法が17世紀中葉から18世紀初頭にかけてロシアの公式に認められた詩法たり得たのは独特の、教会における詠唱のような朗読法が存在していたためであることを、実際にシメオン・ポーロツキイやカンテミール A. Д. Кантемир (1708-44) の詩を引用することによって実証的に論じている。

次に第2節「トレジアコフスキイの『作詩法』」では、18世紀に入るとシメオン・ポーロツキイ以来の13音節からなり、その第7音節の後に休止が置かれる、あるいは11音節からなり、その第6音節の後に休止が置かれる長く荘重な詩型に対して短い音節からなる軽い詩が作られるようになって来たこと、さらに詩行の中でアクセント音節が規則的に配置される傾向が表れて来た経緯を述べ、そうした流れの中でトレジアコフスキイが1730年にフランスのタルマン P. Tallemant の『愛の島への旅、あるいは心の鍵』 Voyage à l'île d'amour, ou la clef de cœur の翻訳を発表し、その中で彼が当時としては極めて先端的かつある意味では大胆にフランスの恋愛詩を翻訳していること、また彼が『作詩法』が発表するまでの間に軽い詩や、時には荘重な次々と発表し、これが当時のアンナ女帝 Анна (位 1730-40) の宮廷に集う人々の間で好評を博し、彼が一躍宮廷詩人となったことを紹介した上で、『作詩法』の執筆経緯とその斬新性を、またその多々ある不徹底性を検証し、論じるものである。

第2章「ロモノーソフの詩法改革」は構成的に3節からなる。

第1節「ロモノーソフの生い立ちと学問」ではロモノーソフの営為、伝記的事実の内、彼の生い立ちと学問、特に学問に目覚めた彼が隣家の蔵書を次々と読破して行ったこと、彼が「わが学業の門」と呼んだメレチイ・スモトリツキイ Мелетий Смотрицкий の『スラヴ文法正用大成』 Грамматика славенския правильное сунтагма とレオンチイ・マグニツキイ Леонтий Магницкий の『算術』 Арифметика との出会ったこと、学問に対する情熱がもはや抑え切れなくなったロモノーソフがつ

いにモスクワ行きを執行し、身分を偽ってスラヴ・ギリシア・ラテン<sup>アカデミヤ</sup>学院に入学し、ここで学問を修めたこと、身分詐称が露見しても特に成績優秀のゆえをもって学業継続が認められたこと、優等生としてペテルブルグ帝室科学アカデミーの大学部に送られ、さらにドイツ留学を命じられてマールブルク大学とフライブルクの鉱山アカデミーに学んだこと、ドイツでドイツ詩や西欧諸国の詩に出会い、これを研究することで独自のロシア詩法を構築して行ったことなどを述べるものである。

第2節「ロモノーソフの“詩論”の形成」は、ロモノーソフが“詩法”のみならず“詩論”、すなわち詩そのものに対する見解をいかにして構築して行ったのかということ考察し、実証的に論じるものである。ロモノーソフは故郷にいた頃シメオン・ポーロツキイの『韻文詩篇』*Псалтирь рифмотворная* にめぐり合い、これが彼と詩との最初の出会いとなった。その後彼はスラヴ・ギリシア・ラテン学院で古典古代の詩法と詩を学び、特にオウィディウス Ovidius の『変身物語』*Metamorphoses*、ホラーティウスの頌詩、そしてウェルギリウス Vergilius の『アエネーイス』*Aeneis* を耽読している。さらに彼は留学中にトレジアコフスキイの『作詩法』やドイツを初めとする西欧諸国の詩を研究し、詩法を形成するに至っている。ただロモノーソフの“詩論”の形成には彼自身の古典古代の詩人に対する傾倒ぶりが大きく寄与しており、中でもホラーティウスの『詩論』の影響が最も強く見られる。このことは彼が壮年期に当たる1755年に著した論文「詩人の資格に関する見解」*О качествах стихотворца рассуждение* から知ることが出来るが、この論文については第3章第2節で詳しく論じるものである。

第3節「『ホチーン占領に寄せる頌詩』と『ロシア詩法に関する書簡』の執筆」は、彼のロシア詩法改革案が提示されている『書簡』とそのテーゼに基づく実作『ホチーン占領に寄せる頌詩』*Ода на взятие Хотина* の執筆経緯と特に『書簡』の内容を、トレジアコフスキイが『作詩法』で提示した詩法改革案と比較することにより詳しく検討し、ロモノーソフの改革案の勝因を論じるものである。また、ここではロモノーソフの『書簡』の問題点、つまり彼がピリーヒイ *пиррихий* (弱弱格) を極力排除したこともプーシキン A. C. Пушкин (1799-1737) の詩やベールィ A. Белый (1880-1934)、ブリューソフ В. Я. Брюсов

(1873-1924) というシンボリスト、またトマシェフスキイ Б. В. Томашевский (1890-1957)、ジルムンスキイ В. М. Жирмунский (1891-1971) というフォルマリストの主張を例証することによって論じている。

続く第3章「詩人としてのロモノーソフ」は構成的に3節からなる。

まず第1節「ロモノーソフとトレジアコフスキイ」は、ロシア詩法改革におけるロモノーソフの先駆者トレジアコフスキイとロモノーソフを詩法、実作双方の面から比較し、後者の優位を前者をめぐり不幸な状況などを実証的に論じるものである。トレジアコフスキイとロモノーソフの詩法をめぐり論争にはスマローコフも加わり、極めて複雑な展開を見せるが、結果的に実作面での成功によってロモノーソフの詩法は認められることになった。またトレジアコフスキイが音節詩法の本場であるフランスに留学したのに対してロモノーソフが音節アクセント詩法が根付いたドイツに留学したことは、彼が詩法を構築するには極めて幸運なことであった。

第2節「ロモノーソフにとっての『詩』とは」は、彼の詩に関する位置付けを論じるものである。彼自身の“詩論”は『修辞学教本』 Краткое руководство к риторике、『雄弁術教本』 Краткое руководство к красноречию、『ロシア文法』にその片鱗を窺い知ることが出来、また論文「詩人の資格に関する見解」はまさに彼の“詩論”とでもいふべき著作である。彼自身は詩というものを、個人の感懐、感情の表出ではなく常にロシア国民全体の感情を歌い上げるものと位置付けていた。これは彼の実作が主として頌詩であることから十分肯かれることであり、また古典主義を標榜する彼にあってはなおさらのことであると見えよう。

第3節「ロモノーソフと同時代、あるいは後代の詩人たち」は、ロモノーソフが同時代、あるいは後代の詩人、中でも彼のライバルであったスマローコフ А. П. Сумароков (1717-77)<sup>5</sup>と、彼同様に頌詩のジャンルで多くの作品を残し、18世紀ロシア最大の詩人と呼ばれるデルジャーヴィン Г. Р. Державин (1743-1816) に与えた影響を論じるものである。

---

<sup>5</sup> スマローコフの生年については1718年とする説もある。

スマローコフは最初期にトレジアコフスキイの詩法を信奉し、ロモノーソフが詩法改革案を提起するやトレジアコフスキイとともにこれに反対の意を表明している。後に彼はロモノーソフの詩法を受け容れ、一時期その影響下にあったが、その後独自の詩法を構築し、恋愛詩や哀歌、<sup>エレジー</sup>田園詩やアナクレオン'Ανακρεων 風頌詩<sup>6</sup>といったロモノーソフとは別のジャンルで多数の名作を残している。デルジャーヴィンは当初古典主義の模倣から出発しながらも、後に独自の詩想を得て、頌詩を人間離れした美辞麗句の洪水から解放し、真摯かつ率直な詩人の感懐や愛着を思いのままに表現し、また鋭い風刺によって社会批判を展開する新たな言葉の武器として再生させるべきであるとの見解を構築し、それまでの頌詩とは違った生彩あふれる作品を著し、後にロマン主義の詩人たち、中でもデカブリスト派の詩人たちやロシア最大の詩人プーシキンが活躍する下地を整えている。しかしこの2人とても詩法的にはもっぱら音節アクセント詩法を用いていたのであるから、ロモノーソフが及ぼした影響というのはやはり大なるものである。

こうして3章に渡ってロモノーソフの“詩法”構築経緯とその同時代、あるいは後代における影響を論じた筆者の修士論文は「おわりに」でこの論文の意義と問題点、そして筆者の今後の抱負を述べ、締めくくられる。

修士論文を締めくくるに際して、筆者が強く思うのは、ロモノーソフの詩法改革案が勝利し、彼の新しい詩法、すなわち音節アクセント詩法がロシアで広く認められるようになったのは、ひとえにこれがロシア語の本質に適ったものであるからに他ならないということである。もちろん、ロシアの音節アクセント詩法はロモノーソフ1人の手によってのみではなく、彼の同時代、あるいは後代の詩人たちのたゆまぬ努力と詩才にもよって改正されたものであることは言うまでもない。しかしながら、その基盤はやはりロモノーソフによって築かれたのであり、この事実には全く異論を挟む余地はない。こうしたことから、彼

---

<sup>6</sup> アナクレオンの詩、またこれを模したアナクレオンテアの詩は18世紀ロシアの詩壇で大いにもてはやされ、カンテミールを初め多くの詩人がこれを訳しているが、19世紀に入ってもなお、プーシキンを初めとする幾人かの詩人がこれに親しんでいる。

のロシア詩法改革の成功は、詩人としてのみならず、『ロシア文法』や有名な「三文体説」を述べた『ロシア語における教会用書物の効用に関する緒言』 Предисловие о пользе книг церковных в российском языке を著した優れた語学研究者としてのロモノーソフの視点の確かさと、その明晰な頭脳によってもたらされたものということが出来、彼の多才万能ぶりには改めて、ただただ瞠目するばかりである。

本修士論文はロモノーソフの“詩法”が最も明確に示されている『書簡』の執筆経緯とその果たした役割を中心に据え、ロモノーソフによるロシア詩法改革を実証的に論じたが、このテーマはまとまった研究としてはほとんどなされていないため、今日においてもなお中心的なロシア詩法たり続けている音節アクセント詩法の真の創始者がロモノーソフであることを論じた本修士論文はロシア文学研究、中でもロシア詩研究に携わる人々に改めてこの見解を提示するものである。ただ筆者は詩人ロモノーソフのフォーマルな部分、つまり彼の“詩法”を中心に論を展開したため、実作の分析がそれほど行えなかったという憾みがあることは事実である。しかし彼の実作を細かく分析して行くには、彼の言葉を借りれば“для краткости времени”であり、また筆者は詩というものを特に「言語による音楽」と考え、詩の内容はともかく韻律を構成する詩の構造をまず第 1 に考える者であるので、本修士論文が形式偏重の傾向を帯びるのはやむを得ないことである。

ロモノーソフのロシア詩法改革は何よりもロシア語の本質に適った詩法を導入したということで、極めて革新的かつ重要なものである。音節アクセント詩法の導入によってロシア詩は音楽性を手に入れ、真の「言語による音楽」として機能するようになった。ただ、歴史というものの常として、ロモノーソフの改革は 18 世紀においては極めて革新的なものであったが、19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍したブロック A. A. Блок (1880-1921) や前掲のベールィ、ブリューソフといったシンボリズム詩人たちや 20 世紀初頭に活躍したフレーブニコフ В. Хлебников (1885-1922) やマヤコフスキイ В. В. Маяковский (1893-1930) に代表される<sup>フトゥリス</sup>未来派詩人たち、さらにパステルナーク Б. Л. Пастернак (1890-1960) やツヴェターエワ М. И. Цветаева (1892-1941) といった 20 世紀ロシアを代表する詩人たちは音節アクセント詩法をもはや古い

ものと見なし、その超克を目指している。激動の時代に刻一刻と変化を続ける言語や文学 —18 世紀ロシアのそれらもそうであるが— に強い関心を抱く筆者としては、今後はシンボリストや未来派などの詩の形式的な実験性も視野に入れて、さらにロシア詩の研究に邁進する所存である。

また、ロシア詩法の術語に対する訳語については今までに専門家の間でも統一が図られておらず、これは非常に憂慮すべき事態である。筆者は論文中で折に触れて自らの訳語を提示し、訳語統一に対する注意を喚起したが、これはロシア詩研究家にとって急務であると思われるのではない。

18 世紀ロシア文学は日本では未だに発展途上の段階にあるが、この時代は 19 世紀にロシア文学が開花する原点となった極めて重要な時代である。筆者はロモノーソフの“詩法”を取り上げ、その意義を論じたが、これはロシア語学、ロシア文学における 18 世紀の重要性を改めて示すためである。また韻律論的なロシア詩研究も日本ではそれほど盛んではないため、本論文は詩研究の新たな可能性を提起するものでもある。言語の芸術としての詩を研究することは、言語の見えにくい側面を明らかにするものとして、極めて重要であると筆者には思えてならない。本修士論文は以上挙げたことを強く提起するものである。

#### 修士論文文献

- Баевский, В. С. : «История русской поэзии», Смоленск, 1994.
- Белый, А. : «Символизм», М., 1910.
- Берков, П. Н. : ‘К спором о принципах чтения силлабических стихов XVII — начала XVIII в’, «Теория стиха», Л., 1968, с. 294-316.
- Брюсов, В. Я. : «Основы стиховедения», 2-е изд., М., 1924.
- Еремин, И. П. : ‘Симеон Полоцкий — поэт и драматург’, «Симеон Полоцкий. Избранные произведения», М.—Л., 1953, с. 257-258.
- Жирмунский, В. М. : «Введение в метрику», Л., 1925.
- Куник, А. А. : «Сборник материалов для истории императорской Академии Наук в XVIII веке», ч. I, СПб., 1865.

- Лебедев, Е. Н. : «Ломоносов», (Серия биографий «Жизнь замечательных людей»), М., 1990.
- Ламанский, В. И. : «Михаил Васильевич Ломоносов: Биографический очерк», СПб., 1864.
- Ломоносов, М. В. : ‘Письмо о правилах российского стихотворства’ [1739], «Полное собрание сочинений » (ниже ПССЛ) , т. 7, М.-Л., 1952, с. 9-18.
- . : ‘Краткое руководство к риторике на пользу любителей сладкоречия’ [1744], ПССЛ, т. 7, М.-Л., 1952, с. 20-79.
- . : ‘Краткое руководство к красноречию. Книга первая, в которой содержится риторика, показывающая общие правила обоего красноречия, то есть оратории и поэзии, сочиненная в пользу любящих словесные науки’ [1748], ПССЛ, т. 7, М.-Л., 1952, с. 91-378.
- . : ‘О качествах стихотворца вообще рассуждение’ [1755], «Избранные философские произведения», М., 1950, с. 517-587.
- . : «Российская грамматика» [1755] (‘Фотомеханическое воспроизведение’, Zentralantiquariat, Leipzig, 1972.)
- . : ПССЛ, т. VIII (Поэзия, ораторская проза, надписи 1732-1764 гг.), М.-Л., 1959.
- . : ПССЛ, т. X (Служебные документы, письма 1734-1765 гг.), М.-Л., 1957.
- Морозов, А. А. : ‘М. В. Ломоносов, вступительная статья’, «М. В. Ломоносов. Избранные произведения» (Библиотека поэта, большая серия), 3-е изд., Л., 1986, с. 5-58.
- Некрылова, А. Ф. : «Русские народные городские праздники, увеселения и зрелища. Конец XVIII — начало XX века», М., 1984. [А. Ф. ネクリローヴァ 『ロシアの縁日 ペトルーシカがやって来た』 坂内徳明訳、平凡社、1986]
- Пушкин, А. С. : ‘Зимний вечер’, «Полное собрание сочинений», т. II, Л., 1977, с. 258-259.
- . : ‘Нет, я не дорожу мятежным наслаждением’, «Полное собрание сочинений», т. III, Л., 1977, с. 356.

- . : 'Евгений Онегин', «Полное собрание сочинений», т. V, Л., 1978, с. 8-184.
- Серман, И. З. : «Поэтический стиль М. В. Ломоносова», М.-Л., 1966.  
«Словарь литературоведческих терминов», М., 1974.
- Смотрицкий, М. : «Грамматіки славенския правильное сунтагма», Вильно, 1619., ('Факсимильное издание', Київ, 1979.)
- Тимофеев, Л. И. : 'В. К. Третьяковский, вступительная статья', «В. К. Третьяковский. Избранные произведения» (Библиотека поэта, большая серия), М.-Л., 1963, с. 5-52.
- Томашевский, Б. В. : «Русское стихосложение», Пг., 1924.
- . : 'К истории русской рифмы', «Стих и язык. Филологический очерк», М.-Л., 1959.
- Третьяковский, В. К. : 'Стихи разных случаев' [1730], «Избранные произведения» (Библиотека поэта, большая серия), М.-Л., 1963, с. 55-100.
- . : 'Из романа «Езда в остров любви»' [1730], «Избранные произведения» (Библиотека поэта, большая серия), М.-Л., 1963, с. 101-124.
- . : 'Новый и краткий способ к сложению российских стихов с определениями до сего надлежащих званий' [1735], «Избранные произведения» (Библиотека поэта, большая серия), 2-е изд., М.-Л., 1963, с. 365-420.
- . : 'О древнем, среднем и новом стихотворении российском' [1752], «Избранные произведения» (Библиотека поэта, большая серия), 2-е изд., М.-Л., 1963, с. 425-450.
- Холшевников, В. Е. : «Основы стиховедения», 2-е изд., Л., 1972.
- . : «Стиховедение и поэзия», Л., 1991.
- Якобсон, Р. О. (Jakobson, R) : 'Влияние народной словесности на Третьяковского', «Selected Writings», IV, the Hague, 1966, pp. 613-633.
- Aquien, M. : «La versification» (Collection QUE SAIS-JE? N° 1311), Paris, 1990.
- Boileau, N. : «Satires, Epîtres, Art poétique», St-Amand, 1996.

- Silbajoris, R. : « Russian Versification », Columbia, 1968.
- Unbegaun, B. O. : « Russian Versification », Oxford, 1956.
- 伊東一郎「民謡における音楽と言語」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』第1集、早稲田大学大学院文学研究科、1975年、115-131頁。
- 。「記号体系としての音楽」『言語』1976年8月号、大修館書店、1976年。
- 。「ロシア・フォークロアの言語と詩学」『講座 世界の言語 第4巻 言語の芸術』大修館書店、1980年、181-214頁。
- 井上満編『平凡社世界名詩集大成 12 ロシア編』平凡社、1959年。
- 岩間徹編『世界各国史 4 ロシア史 (増補改訂版)』山川出版社、1979年。
- オウィディウス、樋口勝彦訳『恋の技法』(平凡社ライブラリー)、平凡社、1995年。
- 川端香男里編『ロシア文学史』、東京大学出版会、1986年。
- 川崎隆司『ロシア詩の歴史』、恒文社、1993年。
- P. ギロー、窪田般彌訳『フランス詩法』(「文庫クセジュ」489)、白水社、1971年。
- 杳掛良彦「ロモノソフと古典古代の詩人」『ロシア・西欧・日本：木村彰一教授還暦記念論文集』、朝日出版社、1976年。
- 高津春繁『ギリシアの詩』(岩波新書(青版)238)、岩波書店、1956年。
- 佐藤純一「メレチイ・スモトリツキイとその文法」『東京大学教養学部外国語科研究紀要』第27巻、第4号、東京大学教養学部、1980年、25-53頁。
- 。「十八世紀の正書法論争—ロモノソフとトレジアコフスキイ」『RUSISTIKA』第2号、東京大学文学部露文研究室、1982年、16-27頁。
- 東郷正延、染谷茂、磯谷孝、石山正三編『研究社露和辞典』研究社、1988年。
- 松本仁助・岡道男訳『アリストテレス 詩学 ホラーティウス 詩論』(岩波文庫)、岩波書店、1997年。
- 谷耕平「ロシア詩法覚え書き」『ヨーロッパ文学研究』第5号、早稲田大学文学部、1963年、137-161頁。
- 藤沼貴「ロモノソフのモザイク画」『比較文学年誌』第13号、早稲田大学比較文学研究室、1977年、31-46頁。

藤本淳雄、岩村行雄、神品芳夫、高辻知義、石井不二雄、吉島茂『ドイツ文学史〔第2版〕』東京大学出版会、1995年。

諸星和夫「シメオン・ポーロツキイとポーランド文化」『窓』第46号、ナウカ、1983年、10-16頁。

——、「シメオン・ポーロツキイと『韻文詩篇』—序文に指摘されたいわゆるポーランド語韻文訳詩篇について」『ロシア語・ロシア文学研究』No. 16、日本ロシア文学会、1984年、14-25頁。

山口巖『中世ロシア文法史』、名古屋大学出版会、1991。

山口四郎『ドイツ詩を読む人のために 韻律論的ドイツ詩鑑賞』郁文堂、1982年。

なお、本稿は修士論文とともに提出した概要書に筆者が加筆したものである。